

活版印刷で自著出版

紙に押し付けて文字を刷り込む活版印刷は、今では少数派になった技術。三浦さんは「電子書籍元年」といわれる今、『紙の本』とは何か、活字とは何かをあらためて確かめたかった」と話している。

紙に刻まれた文字。ざらっとした懐かしい手触り一。横浜市の出版社「春風社」の代表を務める三浦衛さん(53)＝井川町出身＝が、活版印刷による自著を刊行した。IT化が進む中、金属製の活字を

懐かしの手触り感じて 井川町出身 三浦さん



三浦 衛さん

著書は「父のふるさと 秋田往來」(B6判、283頁)。故郷である秋田への思いをつづったエッセーだ。表紙には和紙のような手触りの布紙をあしらひ、本を収める函には、受けと蓋がつながっている「身と蓋」型を取り入れるなど装丁にもこだわった。

15世紀にグーテンベルクが発明した活版印刷技術は、つい20年前まで印刷の主流だった。しかし、コストを低く抑えることができるオフセットやデジタルなどの新技術に押され、今は主役の座を奪われている。

「パソコン、携帯電話、電子書籍。ディスプレイで文字を見るとき大きな流れは止めようがない。何より、便利ですから」。そう語る三浦さんだが、現在の電子書籍ブームには違和感も感じている。「電子媒体は確かに便利だけれど、『便利』は一つの価値

三浦さんの著書を印刷した内外文字印刷(東京都板橋区)は、全国でも数少ない活版印刷所。棚の中にびっしり並んだ「金属活字」の中から一つ一つの字を選び出し、版に組み込み、印刷機にセットする。作業の多くは職人の手仕事で進められた。

内外文字印刷の社是は「いつまでも活版印刷 どこまでもグーテンベルク」。代表の小林敬さん(76)は「100円稼ぐのに2500円掛けるような仕事だが、理屈抜きでやってきた。文字と言葉を人間の手で表すことが活版印刷の全

活版印刷による三浦さんの著書。文字が刻まれた紙には、ざらっとした手触りがある



活字を版に組み付けていく作業＝東京都板橋区の内外文字印刷(撮影・春風社)

て」と言う。

時代が変わっても「活版がいい」とこだわる人は今もいる」と小林さん。「三浦さんがコスト度外視でこういう本を作ってくれたことは、限らない喜び。『永遠に活版印刷』という気持ちで続けたい」と感慨深げだ。

活版印刷による書物は、紙の裏に、文字を押し込んだ跡が刻印されたようにくっきり残る。「本来は白い紙にすぎないのに、そこに文字が刻まれた瞬間、立ち上がってくるものがある。本とはそういうもの。活版印刷の本を作ってみて、そのことをあらためて感じた」と三浦さんは話す。

「父のふるさと」は税込み2千円。問い合わせは春風社 ☎045・261・3168 (三浦美和子)

きょうの言葉

どんなこと けるよりは勝 しいだろう。 しかし、こ いて、い けらる。 時には計画が失敗することもあるだろう。願いたいことも、ライバルのけることもある。 しかし、負けたからという時点でへきってしまった